

第二言語習得研究と 日本語教育研究

—— ことばの習得研究：目的・領域・方法 ——

筑波大学教授 岡崎 敏雄

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究についての情報をおとどけています。今回のテーマは第二言語習得研究と日本語教育研究です。

1. 第二言語習得論研究の目的と研究領域

第二言語習得論研究の最終的なゴールは言語学習者の言語能力やコミュニケーション能力がどのようなものであるかを記述し、その記述に基づいて説明することです。このゴールを達成するために、学習者の言葉のサンプルを集めたり、学習者が言葉を使っているときにどのような配慮をしているかを自己報告してもらったり、どのような言葉の形や使い方が正しいと考えるか質問したりします。

四つの研究領域があります。

A. 第一の領域 学習者言語の特徴

学習者の示す言語の特徴を記述する領域です。：(1)誤用、(2)習得の順序、(3)学習者の学習条件による違い (variability) (4)言語の使い方に関わる語用論的特徴に焦点が当てられます。

B. 第二の領域 学習者の外的要因：社会的条件と インプット、インターアクション

社会的条件とは例えば言語教育のプログラムの性格の違い 分離 segregation(学習者は言語的多数派の学習者とは別のプログラムで第二言語を学習したり、第二言語を使って教科を学習する) 母語保持(言語的少数派の第一言語が家庭ではなく教育の場で教えられ、使われることを目的とする) サブマージョン submersion(第二言語学習者はその言語を母語とする学習者が多数を占めるクラスで教えられる) イマージョン immersion(社会的に地位の高い第一言語がその第一言語の学習者だけで構成されるクラスで第二言語を使ってバイリンガルの

先生によって教えられる) 外国語教室(日本で英語が外国語として教えられる)などの違いのことです。どのプログラムのタイプかによって言語学習の進み具合や学習成果が異なっていることが報告されています。

インプットの研究は、第二言語の教室で先生が学習者に向かって用いる言葉が通常のその言語の使い方と違う様子(teacher talk)や、第二言語の学習者と母語話者との間、または第二言語学者同士の間で交わされる談話の特徴の分析などが行われます。インターアクション研究ではまた、小グループの教室活動と教師中心の授業で見られるインターアクションの違い、タスク活動のタイプの違い、例えばあるタスクを達成するために学習者がお互いに情報をやりとりする双方向タスク(two way)か、一方向で情報が伝えられるだけのタスク(one way)かによるインターアクションの違い、またはそこで交わされる、聞き返したり確かめたりしながら進める意味の交渉 negotiation of meaning の違いの研究があります。

C. 第三の領域 学習者の内的要因

内的要因は外から観察することが難しいので学習者の発話や自己報告等をデータとして研究されます。代表的な要因の一つは、言語転移 language transfer と呼ばれるもので、学習者の第一言語の特徴が第二言語を学習する上にどのように取り入れられているかを研究します。目標言語の能力を十分に獲得するまでの過程で学習者が示す中間段階の様々な文法的特徴を扱う中間言語 interlanguage 研究もこの領域の研究です。

D. 第四の領域 学習者

一人ひとりの学習者の違いによってどのように言語習得が異なっているか、また異なった結果をもたらす要因

となるものは何かについて取り上げる領域です。取り上げられる要因としては、動機、態度、学習のストラテジー（例えば単語の記憶のために自分の国の言葉に関連付けて覚えたり、自分の学習動機を高めるためにこの課が終わったらケーキを食べようという情意的なストラテジーなど）があります。この領域の研究によって、なぜある学習者は別の学習者よりも速く学習できたり、高い言語能力のレベルに到達できるかなどについて解明します。

2. 第二言語習得研究の方法

大きく次の三つがあります：(1)標準テスト、(2)心理学的テスト、(3)言語誘出法 language elicitation measures.

標準テストとは英語のTOEFLや日本語能力試験（厳密には標準化はされていないがそれに準ずる）などで、いわゆる客観的テストによって学習者の能力のレベルを測るものです。心理学的テストとは、質問紙によって例えばどういう理由で日本語を勉強するか、どういうタイプの教室活動がおもしろいかなどについて質問をし、統計的処理を行うものです。言語誘出法には次のようなものがあります。

A. 誘出的模倣 elicited imitation

検査をされる学習者は録音された文（または文章）を聞いて聞こえた通りに繰り返すことを求められます。それによって学習者の中にでき上がっている第二言語の文法の構造がどのようになっているかを引き出すことができます。

B. ストーリーテリング

学習者は例えば絵や写真を見てその内容を口頭で述べたり、書いたり、パートナーとそれについて会話を交わしたりします。誘出模倣の場合には与えられた文章を繰り返すというデータしか得られないのに対して、ストーリーテリングではより自然な言語活動のデータが得られます。

C. 文法的判断 grammaticality judgements

学習者は示された文が文法的に正しいと思うか間違っていると思うか尋ねられます。学習者の文法的能力を見るものです。

D. 順位付け ranking

学習者は四つから五つほどの文を示され、正しさ、適切さの点から最も正しいものから最も正しくないものまで順番に並べることが求められます。文法的判断の方法が一つの文に関する判断であるのに対して、関連する文

に関する能力の広がりを見ることができます。

E. 言語タスク language tasks

学習者は例えばペアになってあるゲームのし方をもう一人の相手に教えて下さいというような課題の活動を与えられます。学習者がやりとりをする過程でなされる発話をデータとして研究を進めます。

F. 談話完成法 discourse completion test

学習者は、例えば「A：昨日満員電車の中で財布をとられてしまったんですよ。」「B：
」
「A：本当ですね。」のようなやりとりの二人目の空白部分に入れてディスコース全体が自然な流れになるようにすることが求められます。語用論的な言葉の使い方、言語行動のあり方の特徴を知る場面でよく使われます。

3. 日本語教育研究

日本語教育研究には、日本語の構造を対象とした日本語学的研究と日本語教育の教室を中心におきている現象を対象とした第二言語習得研究があります。日本語教育の教室でおきている現象は多くの領域にわたります。研究方法も研究者のこれまでの研究経験によって違うでしょう。

また、日本語教育の現場は成人対象か小中高等学校生対象か、留学目的かツーリストガイドなどのような母国内での日本語使用の目的か、漢字圏かなど様々です。

第二言語習得研究の研究領域や研究方法は考えられているよりずっと多様で奥深いと言えます。自分の現場の条件や経験、関心にあったものを前述のような研究領域や方法の中から選んで取りかかりやすいものから始めるとうまいと思われれます。

参考文献

ていねいな概説書：

- Gass, S. & Selinker, D. (1994)
『Second Language Acquisition - An Introductory Course』Lawrence Erlbaum Associates
- ロッド・エリス (1998)
牧野高吉訳 『第二言語習得の基礎』ニューカレント
インターナショナル

学会誌：

- 『日本語教育』日本語教育学会（例えば、1987 水野、1988 渋谷、1993 長友、1995 岡崎など）
- 『Studies in Second Language Acquisition』
Cambridge University Press
- 『Applied Linguistics』Oxford University Press